

モンスター娘に襲われる ASMR クラーケンのリーネ編

(Attacked by a Monster Girl ASMR -Kraken Girl Line Version -)

あらすじ：

冒険者が何度も訪れる大樹海。そこには海さえ存在する。

珍しい魚を釣りにきた冒険者の君は、逆に海に棲むクラーケン・リーネに捕らえられる。

海中で暇を持て余す彼女は、人間を気に入り、交接腕を使って徹底的に犯し始める。

そして最後には自分の執事になるよう命じるが……冒険者が意地でも帰ろうとする場合は、決して開けてはならない財宝を渡すのであった。

登場キャラクター：

クラーケンのリーネ：

樹海の底で暮らすお嬢様。屋敷は立派だが、陸に上がってはならないといわれているため退屈している。屋敷には財宝がたくさんあり、その財宝で空気を作り出せる。年ごろなのでセックスにも興味津々。お嬢様言葉でごまかしているが、実はなかなか口が悪い。スミを吐いて自分の分身を作り出せる。従順な相手には優しくするが、自分の意思に沿わない相手には冷たくなるヤンデレ気質もある。開けた者を人形にしてしまう魔法の箱を持っている。

少年冒険者：

樹海の珍しい魚を釣りにきた少年だが、逆に釣り竿にかかったリーネに海に引きずり込まれてしまう。当初は溺れかかるが、リーネの魔法で呼吸ができるようになった。開けてはならない小箱を開けるなど好奇心にはかなり弱い。

(※制作都合上、一部内容を変更した箇所があります)

1. 出会い～海中のお屋敷～

リーネ「んん～……？」

リーネ「んん～？ ……あらあ～？ これであっての……かしら？」

リーネ「んん～……？ いまいちわっかんねえですわね～。陸のこと、わたくしなあんにも
わかりませんし……」

リーネ「我が家に伝わる宝の一つですから、大丈夫だと思うんですけど……」

リーネ「あらま！」

リーネ「あらあら、そんなにむせて……大丈夫ですの？」

リーネ「落ち着いて～……ほ～ら、深呼吸ですのよ～」

リーネ「うふふ、ちゃんと呼吸できるようになったからしら？」

リーネ「ご安心あそばせ。我が家をを使いましたから、もう大丈夫ですわ。ほら、ちゃんと呼吸できるでしょう？」

リーネ「命が助かって良かったですわね～♪ わたくしもきっとねえ水死体の処理をする
必要がなくなって、一安心ですわあ～♪」

リーネ「わたくしはリーネ。クラーケンのリーネと申しますの」

リーネ「陸に帰るのは諦めてくださいまし？ あなたはもう、わたくしが陸から引きずり込
みましたので……ここで暮らしかりませんの」

リーネ「なあんにもねえ、つまんない深海ですが……くすぐす、あなたがいたら、ちょっと
は楽しくなるかもしれませんわね」

リーネ「あら、この触手が怖いですか？ クラーケンを見るのは初めて？」

リーネ「だあいじょうぶ、とって食いやしませんわ。せっかく陸から深海に連れてきた人間
ですもの、いろいろと遊んで、楽しまないと……ね♪」

リーネ「そうそう、お父様が後継ぎがどうとか、うるさいからあ……」

リーネ「あなたには、そのちんぽが枯れるまで、交尾のお手伝いもしてもらいますからね
……♪」

リーネ「いっぱい楽しみましょうね、人間さん♪ ふふふっ♪」

2. 触手耳かき～触腕で味見～

リーネ「そういえば～……あなたはそもそも、なんでここに来たか覚えてらっしゃいますの？」

リーネ「あらま、覚えていない？ そう……」

リーネ「あなたねえ、樹海の中にある海で釣りをしてたんですよ。なんか珍しい魚でも釣ろうとしたんですの？」

リーネ「そしたらあなたの釣り針が、わたくしの自慢の触手にみごと引っかかり……わたくし怒り心頭ですわ～！」

リーネ「あまりにムカついたんで、えいやあっ、と釣り針を引っぱったら、あなたが釣り竿ごとくっついてきたって寸法ですよ」

リーネ「わたくしのとこにつくころには、あなた心臓止まってましてよ～？ 我が家にたくさんある宝物で、蘇生させて……」

リーネ「魚のエサになる前に、このお屋敷に連れてきてあげましたわ～！ 寛大なわたくしに感謝なさって～？ おーほっほっほ♪」

リーネ「ここは樹海の海の底……水に棲むモンスターたちが暮らしていますわ～」

リーネ「わたくしはクラーケン族で……まあ、イカの魔物ですわね。これでも高貴な身分なんですよ？ 家族からは陸に上がるなと言われていて、ちょっと……いや、すんげえ～退屈なんですけども～」

リーネ「ちょうど退屈しのぎに……わたくしに忠実でえ、なんでも言うこと聞いてくれてえ、一切文句を言わない有能な執事が欲しかったんですの」

リーネ「あなたがわたくしの執事にふさわしいか……これからたっぷり面談してあげますわあ」

リーネ「うふふ……まずは……あなたの味を見てさしあげますわよ……」

リーネ「好みじゃない味だと、触手でからみついても……吐き気がして仕方ないですもの……せめて美味しい味の人間じゃないと、触手で抱きつけませんから……」

リーネ「え？ なんの話かって？ うふふっ……♪」

リーネ「もちろん触手の話ですわあ。クラーケンの触手にはね、味覚を感じる機能がござりますのよお」

リーネ「陸の生物に絡みつくのは初めてだから……どんな味がするのか楽しみですわ～。じゃあ、早速……♪」

リーネ「ほおら、わたくしの触手が、あなたの耳にい……入っていきますわよお～♪」

リーネ「あらっ……ふむふむ……んん～？」

リーネ「あらあらまあ～♪ あなたのお耳、意外とうんめえ～ですわねえ～♪」

リーネ「陸の生き物なんてどんなお味かと思いましたけど、なかなかイケるじゃありませんの～♪」

リーネ「気に入ってしまいましたわあ～、もっともっと味合わせてくださいませ～♪」

リーネ「は～い、触手が、ぐじゅぐじゅぐじゅ～っ……って、耳の中をいじっておりますわよ～？」

リーネ「あらまあ～、口をだらしな～く開けて、気持ちよさそう～。そんなにいいですか～？耳の中、触手でいじられるの～♪」

リーネ「んんん～……♪ あなたの皮膚、とってもデリシャス……んっ、ああんっ……いいですわよお～…美味しい人間さん……♪」

リーネ「これからわたくしに仕えるんですから……わたくしの触手にも慣れてくださいまし～。ほ～ら、触手の先端をお、耳に差し込んでえ……ぐじゅぐじゅぐじゅぐじゅう～♪」

リーネ「んん～……ちゅぽっ……っとお♪ んふふふ、いかがだったかしら？」

リーネ「あらあらあ、目がトロンとしておりますわよ～♪ わたくしの触手でいじられたの、そんなに嬉しかったんですの～？」

リーネ「味見はもう十分ですけどお～…そんなに喜んでくれるなら、もおっとサービスしてあげちゃおうかしら」

リーネ「それじゃあ、前に、移動して……ほうら、来てあげましたわよ～♪」

リーネ「さっきと同じように、左耳にもわたくしの触手を挿入して……なきなくヒイヒイって、言わせてやりますわ～」

リーネ「さ、お覚悟なさって……」

リーネ「ほうら、吸盤のついた粘液まみれの触手があ～…あなたの耳に入っちゃいますわよ～♪」

リーネ「ああ～、いいお顔～♪ わたくしの嗜虐心がぞわぞわ刺激されますわ～♪」

リーネ「イカのモンスターに、触手挿入されてえ、そんなに気持ちいいんですの？ あらあらまあ、とんだド変態さんですわねえ～♪」

リーネ「それともこの触手、リラックス効果とかあるのかしら？ 聞いたことねーですわね。ま～…どうでもいいか♪」

リーネ「は～い、耳の奥、隅から隅までえ……ぐちゅぐちゅつ……ぬちゅぬちゅ……ずっぽ
ずっぽ……♪」

リーネ「耳から脳髄とろけそうなほど、気持ちいいでしょう～♪ で、もお……まだまだ本
気じゃありませんことよお～♪」

リーネ「おほほほ♪ わたくしの本気耳責めはどうかしらあ～♪」

リーネ「耳だけで絶頂してもよくってよお～……そんなにだらしなく口を開けて……わた
くしの執事にしてはブサイクですけども～♪」

リーネ「今だけは許してあげますわあ。ほうら、わたくしの触手、吸盤の一つ一つまで、お
耳でよく感じてくださいまし～♪」

リーネ「あらあ～、右耳にも入っちゃいましたわあ～！ ごめんあそばせ♪」

リーネ「両方のお耳をじゅっこじゅっこされる気分はいかが～♪ って、聞くまでもねーで
すわね♪ そんなに喜んでもらえてわたくし、嬉しいですわあ～♪」

リーネ「んふふふ、触手からあ、クラーケンの粘液もたっぷり分泌してえ……」

リーネ「手加減なしの触手ピストンで……人間さんのお耳にい……いれたり……だしたり
……んふふふ♪」

リーネ「おほほほ、クラーケンの耳いじり、そんなに気に入ってくれましたの～♪」

リーネ「それじゃあ、このまま永遠に、耳いじりしましようかしら～？ 触手は十本ありますから、2本くらいずっと耳に差し込んでいても、どうってことありませんわよ～♪」

リーネ「ほうら♪ じゅっこじゅっこ♪ じゅっこじゅっこ♪」

リーネ「……んふふ、なーんてね」

リーネ「さすがにずっとなんてやってらんねーですわ。ちょっと名残惜しいけど、ここで、
おしまい……♪」

リーネ「味見は十分できましたし……今度はもっと、あなたのこと리를教えてほしい
ですわ……」

リーネ「交尾はそのあと……んふふ、まだまだ人間で試したいことがたくさんありますよ
……耳だけで遊ぶなんて、もったいない……♪」

リーネ「すぐギブアップとか、許しませんわよ？ ちゃんと頑張ってくださいまし、執事見
習いさん……？」

3. 触手コキ ~吸盤交接腕~

リーネ「それでは早速、わたくしの高貴な触手を使って、人間のお精子を搾り取ってさしあげますわあ」

リーネ「いかがかしらあ、わたくしの立派なしょ、く、しゅ♪ どこにでも張りつけるし、味もわかるし……セックスだってできちゃうんですよ」

リーネ「交接腕といいまして、精子を触手の中で保存して、好きな時に授精できるってわけですわ、まあ便利♪」

リーネ「お世継ぎたくさん欲しいですから、あなたは触手セックスに早く慣れて、たくさん射精できるようになってくださいまし？」

リーネ「ほうら、すごいでしょう……こうやって触手であなたの腕をつかんで……自由にできちゃいますよ～」

リーネ「あなた、私には力で絶対にかないませんから……うふふ、抵抗しても無意味ですわ～♪」

リーネ「ああッ!? やっべーですわ……ついつい力を入れすぎて……！」

リーネ「しょ、少々お待ちくださいまし！ え、ええと……骨は折れませんわね？ 関節が外れただけ？ じゃあ、ええと、ここをこうして……」

リーネ「オラアッですわっ！ ……ふうう、これで戻ったかしら？ 大丈夫？ ちゃんと足は動きまして？」

リーネ「ふう、マジ焦りましたわ……もう！ 人間ってば脆弱なんですから！ これからはわたくしに仕えるものとしてしっかり鍛えてくださいまし！」

リーネ「さてっ、と……関節も戻せましたし、触手セックスを始めますわよ～」

リーネ「はあ～い、服は脱ぎ脱ぎししましょうね～♪ ここは水中ですから、こんな邪魔くせーもの、いりませんわよお～？」

リーネ「あらあ、かわいらしいおちんぽ♪ ふふふ、そうですわよね～、まだ子どもでものね～」

リーネ「大丈夫、今からわたくしが、触手で立派なセックス執事にしてあげますわよ～♪」

リーネ「ほうら、わたくしの纖細な触手の先っぽが……あなたのかわいいちんぽに巻き付いていますわよお～」

リーネ「細っこい先端があ、ちんぽの根本からぐるっと回って……少しづつ少しづつ……上のほうに～……」

リーネ「ほうら、ぐるぐる、ぐるぐる～ですわあ～♪ あらまあ、もうカリのところも……
ぐるう～～～と巻いてえ……」

リーネ「おほほっ、ちんぽがすっかり触手に巻き付かれてしまいましたあ～♪ いかがかし
らあ、一番敏感なところを包まれる感触は……」

リーネ「男性の急所を聞いておりますから、もちろん、大切に扱いますわよお～、クラーケ
ンの粘液もたっぷり出て、気持ちいいんじゃありませんこと？」

リーネ「あらあら～♪ そんなに喘いでしまって～……うふふ、まだ本気を出していました
のに、そんなことで持つのかしら」

リーネ「もお～っとすごいことをしてあげますわあ～。ほうら……」

リーネ「うふふ……きゅ～っ……ぽん♪ きゅ～つってしてからあ……ぽん♪」

リーネ「わたくしの触手が吸い付く感触はいかがかしら？ ……って、あらあら、答えを聞
くまでもないようですね」

リーネ「気持ちいいって顔をなさってますわあ～♪ ちんぽを無数の吸盤で吸い付かれる
の、極上でしょう～？」

リーネ「本気で吸い付くと、皮膚がはがれてしましますからね～……優しく……優しく……
っと」

リーネ「たくさんの中盤で……おちんぽにちゅうちゅうキスしてあげますわよお～……ほ
うら、ちゅっちゅつ……ちゅっちゅつ……」

リーネ「んふふ♪ 吸盤キスで、おちんぽがバッキバキに固くなっていますわね♪ そんなに
射精したいのかしら？」

リーネ「わたくしの交接腕で、受け止めてあげるから……どろどろの精液、たっぷり放出し
てくださいまし～♪」

リーネ「では、吸盤をきゅぽん♪ って外してから～……」

リーネ「粘液まみれの触手で、根元からカリまで……ぐじゅぐじゅしごいて差し上げますわ
ね～♪ ぐじゅぐじゅ～♪」

リーネ「どうかしら、クラーケンの触手コキは～」

リーネ「人間の指よりも、よっぽど器用に動かせますわよ～。ちんぽの頭から先まで、完璧
に巻き付いておりますから……お好きなところを締め付けてあげますわよ～」

リーネ「根元をぎゅううう～……ってするのでもお……触手の先っぽで、ちんぽの穴をくち
ゅくちゅするのでも……うふふふ、どれがいいのかしらあ～」

リーネ「あら、全部がいいんですのぉ？ とんでもねー欲張りさんですわねえ。でも構いませんことよお～♪」

リーネ「ほら、ちんぽの根っこを締め付けてからあ……尿道のところを、触手の先っぽでくちゅくちゅいじってえ～♪」

リーネ「あらまあ、腰がへコへコしてますわよ～♪ うふふふ、性器に挿入したわけでもないのに、もうセックスの気分になっちゃってるのかしらあ～」

リーネ「まあ、交接腕も性器といえるのかしら？ だったらこれも間違いなくセックスですわね～♪ わたくしの性器でたっぷり気持ちよくなってくださいまし～♪」

リーネ「あらあら、無様に息が荒くなってまいりましたわね～。もう射精我慢できないのかしら～」

リーネ「いけませんわよお、わたくしの執事なのですから、どんな時でも品格がないと……えっ？ もう無理？ 我慢できない？」

リーネ「仕方ないですわね～。最初だから出血サービスですわあ～♪ ほうら、触手をひとつわ、ぎゅうううううって締め付けてえ……」

リーネ「ついでにさきっぽも触手でぐちゅぐちゅぐちゅ～っとしてあげればあ……」

リーネ「あっはあ♪ でましたわあ♪ どうどっろのお精子がこんなにたくさん♪」

リーネ「おほほほ、尿道に触手を差し込んでるのに、隙間からびゅるびゅるあふれておりますわっ♪ どんだけため込んでたんの～？ くっせえですわね～♪」

リーネ「ご安心なさってえ♪ 無駄撃ちにならないよう……飛び出した精液は、ちゃんと触手で飲み込んでさしあげますからあ……♪」

リーネ「ほうら、触手の先端でえ……精液をごくっ……ごくっ……と♪」

リーネ「あはああん、濃いっ。ぷりっぷりの生まれたて精液が……わたくしの触手の中に入りますわあ♪」

リーネ「んんっ……んぐっ……んむっ……うへえ、につがああ～♪ でもこれで……んふふ、精液回収、完了……っと」

リーネ「おほほ、びっくりしまして？」

リーネ「交接腕と言いましたでしょう？ 精液を触手の中に保存して、いつでも好きな時に取り出せるようになっておりますのよ」

リーネ「粘液が固まってカプセルのようになりますわ～♪ これを体内に保存して、いつでも、あなたの精子で受精できるって寸法ですわよ、すんげーでしょう？」

リーネ「くすくす……まあ、でも、あなた、まだまだ精液だせそうですわね♪」

リーネ「射精したばかりなのに、まだちんぽががっちがちですもの♪ それなら……」

リーネ「今度は交接腕ではなくて、わたくしのなかに直接、精液注いでもらおうかしら
……？」

4. 性交～触手でも性器でも～

リーネ「それではあ……んっ、次は直接、わたくしにおちんぽ挿入してもらおうかしら」

リーネ「んふふ、クラーケンは触手だけじゃなく……ちゃんと人間みたいにおまんこもありますのよ？」

リーネ「ほら、こ～こ♪」

リーネ「触手の中心にい……くばあ～って、大きな穴がありますでしょう？」

リーネ「普通のイカだったらここが口ですけれど……クラーケンはここが性器ですわよ～、異種族とのセックスではこっちを使うんですの」

リーネ「あなただって、ちゃんと女の子の穴にいれたいでしょう？　いいですわよ、今日は特別に、わたくしとのセックス♪　許可してあげますわあ～♪」

リーネ「は～い、こっちにいらっしゃいまし～」

リーネ「触手でわたくしのほうに引き寄せてあげますわあ～♪　そのまま……んっ、そうそう、ちんぽをお、わたくしのおまんこに当てがって～……」

リーネ「はああんっ♪　きましたわあ……陸から引きずり込んだ人間のお……おっきなおちんぽお……」

リーネ「んんっ、ああんう……はあっ……粘液でぬるぬるだからあ、ずりゅうって奥まで入っちゃいましたわね♪」

リーネ「ほらっ、んんっ、最初はゆっくりでいいですわよ～♪　あんっ……んっ……少しずつ、前後に……んっ、動かしてえ……」

リーネ「クラーケンのおまんこに……おちんぽずぼっ、ずぼってえ……んっ、はあんっ……これ、結構、イイかも……♪」

リーネ「自分の触手で結構いじったりしてましたけどお……んうっ、本物のおちんぽをいれるのは初めてですからあ……はあんっ……」

リーネ「あなたもどうかしら？　おまんこ気持ちいい？　ふふっ、クラーケンの処女お嬢様と交尾なんて、とんでもなくレア体験ですから、喜んでくださいましね？」

リーネ「んんっ……んあんっ……いんっ……あふっ……そうそう、いいですわあ、奥までずんっ、ずんっ……って♪」

リーネ「わたくしのおまんこ……きゅうきゅうするでしょう？　水中で交尾しても、絶対に精子逃さないように……隙間なく締め付けるんですよ」

リーネ「あはあん♪ あなた、いい顔なさってますわあ。男の人って交尾の時、そんな顔なさるのね……あんっ……はあっ……ふふふ♪ 勉強になりますわあ」

リーネ「ほうら、わたくしのぉ……んふつ……吸引おまんこでえ……いっぱい気持ちよくなつて……構いませんのよお……うんっ……」

リーネ「そうそう……んんっ……いちにつ、さんしつ……ゆっくりでいいからあ……あんっ、奥まで、ピストンっ……あはんっ……やあんっ……！」

リーネ「いいっ、いいですわっ……あんっ♪ 自分の触手とは違う、かたあいおちんぽお……んんっ……もっともっと突いてえっ♪」

リーネ「ああんっ……！ んんっ……おっ……んはっ……はあっ……んんっ、ん！ あんっ……！」

リーネ「ああんっ……ふふっ♪ やだあ、盛り上がってついつい……触手で抱きついちゃいましたわあ」

リーネ「ほうら、触手でサポートしてあげるからあ……もっと激しく……んっ、あなたのおちんぽでえ、リーネの奥まで突いてえっ♪」

リーネ「うああはああんっ！ ずこずこきたああつ！ んん！ あんっ！ はあんっ！ ん……あううっ！」

リーネ「人間を触手でつかんでえ……がしがし交尾するのすごいですわあっ！ あんっ、人間オモチャにしちゃってるう♪ んふふっ……♪」

リーネ「おんっ！ ほおんっ！ んんおおおっ……♪ おっ、やっべーですわあ♪ お嬢様が出しちゃいけない声上げてるうっ♪ んんんおほおっ……」

リーネ「……あはあ♪ わかりますわよ、出したいのねえ？ お嬢様おまんこに精液出したいんでしょう！ おちんぽがびくびくしておりますわよ♪」

リーネ「んんおうっ！ いいことお？ わ、わたくしと一緒にイクんですのよお！ わたくしの最高に気持ちいいタイミングで、精液出してえっ♪」

リーネ「はああんっ、わたくしもね、もうすぐイクからあつ。すぐイクからあ……ほら、ほらっ、吸盤に負けないくらい、おまんこ締め付けてあげるからああつ」

リーネ「んほおおっイクっ、人間ちんぽでイクっ、わたくしを昂らせなさい！ さあ、さあっ！ んひいいっ！ そこおっ、んおっ！ おほおおっ！」

リーネ「んおおおクル！ 気持ちいのクル！ おまんこびくびくするうっ……んおおイクっ！ イキますわっ！ イクイクイクイクイグううう———っ！」

リーネ「くひいいいんっ！　おまんこに熱い精液っ！　どばどばきたああっ！」

リーネ「おっほう♪　んおおおうう！　ひぐううっ！　熱いいつ、あつ……すごっ……おまんこ精液で……いっぱい……」

リーネ「はあっ……んあああっ……あー……やっべ……すっご……人間交尾って……こんなに……すっげーんですわね……♪」

リーネ「はああんっ……うふうつ……よかったですわあ……」

リーネ「これならあ……あっ……んっ……わたくしの執事も、十分務められますわね……うふふふふ♪」

リーネ「ダメちんぽだったら魚のエサにしてしまおうと思いましたけど……とんでもねーですわ。絶対逃しませんことよ」

リーネ「これからよろしくお願ひしますわね……新しい執事さん……うふふふふ♪」

5. 休憩～触腕マッサージ～

リーネ「んんっ、ふう～……交尾って結構疲れますのね～。一日中泳いだような気分ですわあ～」

リーネ「あなたはどう？ 疲れてらっしゃらない？」

リーネ「……ふふ、そうですわよね。初めての交尾、くたくたですわよねえ。もう立てないって顔してますわあ～」

リーネ「せっかくだし……わたくしが、自慢の触手で、マッサージしてあげてもよろしくてよお」

リーネ「あらっ、ご遠慮なさらず～。ほらほら、そこに寝そべってくださいまし～。ほうら、よっと♪」

リーネ「は～い、そこに横になって……では今からわたくし、寝そべったあなたのこと、触手でマッサージさせていただきますわあ～」

リーネ「執事をいたわるのもお嬢様の務めでしてよ～。それでは……あなたの足から、やつていきますわね～」

リーネ「あンっ♪ あらあら、かなり凝っていますわね～……慣れない環境で、緊張しているのかしら？ よおくほぐしてさしあげましてよ～」

リーネ「ほうら、んしょ～……よいしょ～……力加減はいかがかしら～？ ご希望があったら言ってくださいましね～」

リーネ「ふんふんふん～……粘液ぐっちょぐっちょの触手で～……人間様のお体を～……ぎゅっ、ぎゅっ、ぎゅううう～……♪」

リーネ「ぐにぐに～♪ ぐっちょぐっちょ～♪ はい、次はお腰をやっていきますわよお～」

リーネ「交尾の時、お腰を使ってヘコヘコ動いてましたものね～♪ よお～くほぐしてあげますわあ～……ぐっちょぐっちょ～……と♪」

リーネ「おほほほ、わたくし、腰とかないですからあ……お腹から下は全部触手ですから、よくわかりませんけど、陸の生き物は腰とか、すぐ壊れそうですね～♪」

リーネ「なるべく長持ちするように……うふふ、しっかりほぐしてさしあげませんと……ん～しょっ、よいしょっ……」

リーネ「はい……次はお背中ですわあ～、ここも凝りますものね、大変ですわね～♪ わたくしは水中に適応しているから、凝りとは無縁ですけども……♪」

リーネ「はい、いっちに、さんし……いっちに、さんし……触手でいっぱい、もみほぐしてえ……」

リーネ「あらあら。交尾とは違う声をあげてらっしゃいますわね～。気持ちいいんですの？うふふふ♪」

リーネ「そんなに喜んでくれて嬉しいですわあ。じゃあ、特別サービスも追加してあげますわよお～」

リーネ「はい、ぎゅう～～～♪ 吸盤でお背中に吸い付いておりますわよ～」

リーネ「適度な吸引で……んんっ……お肌に張りを与えますわよ～♪ わたくしも自分のお顔によくやっておりますわ～♪ ふうっ……ふうっ……」

リーネ「んんっ、んしょっ……えいっ……えいっ……んむっ～」

リーネ「うんっ……ほっ！ よいしょっ……えいっ……んんっ……んんんっ」

リーネ「美容効果抜群でしてよお～。ほうら、背中以外にも、顔や、腕に……きゅぽっ、きゅぽっ……きゅっぽん、と♪」

リーネ「はい、吸盤と、触手を使ってえ……特別なお嬢様マッサージですわあ。んんっ……よいしょ……えいっ……んんっ……」

リーネ「力をいれすぎないで……でも、ほどほどに強く……えいっ……んんむ～っ……えいっ……んっ、んっ、んん～～～～～」

リーネ「……きゅ～～～……ぽんっ♪ ふうう、これで大体終わりましたかしら。あ、もう立ってもよろしくてよ？」

リーネ「おほほほ、さっきよりスッキリした顔をなさってますわね♪ 頑張った甲斐がありましたわ♪」

リーネ「さ、今日はもうお休みになって……明日からも交尾を頑張ってくださいましたら……わたくしがまたマッサージしてあげてもよろしくてよ。おほほほほ♪」

6. 趣向を変えて～スミ吐きで分身形成～

リーネ「ふんふんふん～♪ るんるんる～ん♪」

リーネ「おはようございますわ～♪ わたくしの執事様、この屋敷の生活にも慣れたから？」

リーネ「まあ、あなたは呼吸の問題で、この屋敷からは出られないんですけども。無残に溺死してしまいますものね」

リーネ「必要なものは用意しますわ～♪ なんでも言ってくださいまし～♪」

リーネ「さて、今日のおセックスなんですけども……」

リーネ「ちょっと趣向を変えまして……面白いことをやってみたいと思っていますわ♪」

リーネ「わたくし、飽きっぽいんですの。いつも同じじゃイヤなんですわ。というわけで……わたくしの分身を作って、2人でおセックスしましょう♪」

リーネ「ああ、分身といつても、別にどこぞのスライムみたいに分裂するわけじゃあございませんのよ？」

リーネ「わたくし、墨を吐いて、わたくしそっくりの分身態を形成することができますの……やべーやつに襲われた時の緊急対処ですわあ」

リーネ「コミュニケーションはとれませんし、数時間で消えてしまいますけれども……一緒におセックスするなら、いろいろとできるかなあと思いまして♪」

リーネ「じゃ、ちょっと墨を吐き出しますわね♪ んんん～……くちゅ…んちゅ……むぐむぐ……んんむむ……」

リーネ「んんっ……じゅぱっ……んあああええ～……えろお……んええ……れるうう……じゅぷ……ん……べええええ～～～……」

リーネ「んっ……じゅぶ……れろお……んへええ～～～……♪」

リーネ「あらあら、はしたなくてごめんなさいね。いま、墨を吐き出しておりますので……ほら、出した墨が固まってますでしょ？」

リーネ「これがだんだん、わたくしの分身になりますのよ。ちょっとお見苦しいかもしれませんが、ごめんあそばせ」

リーネ「では……んん～……んむっ……んんんちゅ……くちゅくちゅっ……じゅるっ……んはああ～……んべえええ～～……んあああ～……」

リーネ「ああええああ～～～……えええええ～……じゅぶうっ……んんんええろお～～

～～～……♪」

リーネ「んべええろお……んちゅつ……むちゅう……んんむ……えええろお～……あああ
あええ～……じゅぶつ、えろおおおろお～～～～……」

リーネ「ふうう♪ ざっとこんなもんですわあ♪ うふふ、墨を全部吐き出したから、もう
からっぽでしてよお」

リーネ「さて、改めまして、こちらの真っ黒なわたくしが、分身の墨ちゃんですわ。さあ墨
ちゃん、執事にご挨拶なさって～♪」

リーネ「あらまあ～、上手にお辞儀できて偉いですわあ～♪ さすがはわたくしの分身、う
ふふふ♪」

リーネ「じゃ……これから執事に、こちらの墨ちゃんと二人で色々してあげましょうね……
うふふふ、お覚悟なさいませ……？」

7. 二回戦 ~分身と前から後ろから~

リーネ「んふふ、墨吐きで分身もできましたし……うふふ♪ ジャあ、早速おセックスいたしましょうか～♪」

リーネ「あ、墨ちゃんは後ろのほうからね？ はい、執事さんに回りこんで～」

リーネ「は～い、今、墨ちゃんが後ろから抱きついてますわあ～♪」

リーネ「わたくしの分身だから……ふふっ、墨ちゃんも執事さんがだいすき♪ なんすわねえ～♪」

リーネ「背中が墨で真っ黒ですけど、別に構いませんわよねえ？ わたくしがお口から吐き出した、とっても高貴な墨ですものねえ♪」

リーネ「じゃあ、早速、おちんぽをお……」

リーネ「そ～れっ♪ 墨ちゃんの触手が、おちんぽに巻きついておりますわよお～」

リーネ「では触手でしごきながらあ……わたくしがこのおちんぽくわえて、しゃぶってさしあげますわね～♪」

リーネ「うふふ♪ ご主人様にご奉仕させるなんて、いけない執事ですわあ……こうやって……あなたの前にひざまずいて……フェラチオさせるなんて……」

リーネ「クラーーケンの吸いつき、堪能してくださいませ～♪ では早速……あ～むっ、むじゅう、じゅるうっ♪ れろおろおおお～♪」

リーネ「んおっ……おひんぽおいしい♪ ジュブっ……はぶっ、んむっ……じゅぶうっ、んんっ……」

リーネ「じゅぶっ……じゅるるう、はぶっ……んむうっ……んんっ……」

リーネ「ふはあ……っ♪ うふふ、ど～お？ 墨ちゃんの触手で、おちんぽの根本ぎゅ～つてされながら、先っぽをご主人様にしゃぶられるのはあ～♪」

リーネ「おほほ♪ 好き好き～って顔してますわねえ♪ ジャあもっとしゃぶってあげますわあ～♪」

リーネ「はあむう……んんっ♪ ジュブっ、れろおおつ、ずるつ、じゅろろろろろお――――――」

リーネ「んんっ、んおっ！ んぶっ、んっ！ ジュブ……！」

リーネ「んんんっ♪ はぶっ！ んんぶっ、んちゅうつ……ぶはああ♪」

リーネ「ふう～……あごが疲れましたわあ……」

リーネ「ん～、でも……くすぐす、おかげで、おちんぽばっきばきになっちゃいましたわね

え～♪」

リーネ「優秀な執事で嬉しいですわあ～♪ それじゃ、また今日も、おセックスしましょう……ね？」

リーネ「さ、今日はあなたが上になって……おちんぽ入れてくださる……？」

リーネ「はあああんっ……おちんぽきたああっ……」

リーネ「はああっ……んんっ……あんっ……やああっ……おまんこにおちんぽ差し込まれてえ……体がびくびくしちゃうんっ……触手はねちゃう……」

リーネ「んんあっ……いいですわあ……♪ んんっ、わたくしの執事さん、しっかりおセックスが上達して……はんんっ♪」

リーネ「ふふふ、わたくしの上にまたがって、おちんぽ挿入して……背中からは、墨ちゃんにのしかかられてますわねえ？ ……あんんっ♪ 二人分の体重かけるピストンすっごおい♪」

リーネ「んっ、力強いおセックス、もっとしてえっ♪ はああっ、んあっ、あんんっ♪ いいつ♪ おちんぽずこずこっ、いいですわあっ……♪」

リーネ「ああんっ♪ あら……？ 墨ちゃん、どうしたんですのぉ」

リーネ「あらああ～♪ うふふ♪ 墨ちゃんも我慢できなかつたんですのぉ？」

リーネ「執事さんのお耳に、真っ黒な触手、挿入しちゃいましたわねえ♪ うふふ♪」

リーネ「んんっ……挿れたり、挿れられたりでえ、もうわけがわかんねーですわねえ？ うふふ、ほらほら、耳かきによがってないでえ、こっちも動いてえ……♪」

リーネ「んんおおっ♪ すっごい腰ふりきたああっ♪ んんあっ……はんっ……あんっ……いいっ……ひぐうっ……んいっ……あんんっ♪」

リーネ「耳の中いじられて興奮しちゃったんですのぉ？ なんでスケベなっ、あんっ、執事のかしらあっ……んあんっ……はんっ！」

リーネ「もおう……♪ 触手を片耳にいれただけで、こんなにつよピストンするならあ……ふあんっ……両耳に挿入したらあ……どうなるのかしらねえ……？」

リーネ「あああ～んっ……いいですわあ……墨ちゃんに両方耳かきされてえ……情けなく涎たらしちゃう顔……んんっ……あんう！ 興奮やべーですわねっ♪」

リーネ「ほうら、もっともっとくちゅくちゅされてえ……全身わたくしの触手まみれで、おセックスするんですのよ～♪ ほら、ほら、ほうらあっ！」

リーネ「ほおおおんっ!? あんっ、激しいピストンきたあっ！ おおっ、んおっ……はん

っ！ んんおおつ……」

リーネ「やっぱあつ、専属執事のお……はげしめピストンやべーですわあつ！ ほひいっ！

やんつ、いいつ！ 奥にごつごつ当たるううつ！」

リーネ「くひいいつ！ これやべっ！ すんげーですわっ！ 卵巣刺激されちゃううんつ！ おっほおお、いっぱい卵産みたくなりますわっ！ おっ！ んおっ！ んおおおほおっ！」

リーネ「ああはんっ……いいつ……んひいっ！ はああつ！ おんつ！ んほおつ！ あつ、やべっ……はあっ！ あんつ！」

リーネ「ひいんっ！ ああんっ……ほおおんっ！ いいですわあ、交尾最高ッ！ ああんっ！ 神経びくびくしちゃううんっ！」

リーネ「もっと！ もっとしてえっ！ あんんっ！ 触手まみれでがしがし交尾してくださいましっ！」

リーネ「んんんあはあんっ！ ほおおつ、おまんこ溶けるつ、バカになるうつ！ お嬢様おまんこ、人間ちんぽにかきまわされるううつ！」

リーネ「あああんっ！ これ、もう、限界ですわあつ！ わたくしイクっ！ ほおおんっ！ おほおおつ！ おちんぽに、はしたなく突き回されていきますわあっ！」

リーネ「くひいっ！ あなたもおっ、あなたもイってくださいませえ！ わたくしの卵巣に、たっぷり子づくり精子かけてええっ！」

リーネ「おっほおおお！ すっげーのくる！ お嬢様アクメきますっ！ あつ、ダメっ、もうダメっ、イクッ！ あーダメダメっ！ イクイクイクイグううううつっ！」

リーネ「くひいいいいんっ！ やけどしそうな精液きたあああんっ！」

リーネ「おっ、おおんっ……！ わたくしの高貴なおまんこにいい……人間精液、あんっ……くひつ、びしゃびしゃキたああ……っ」

リーネ「おっ♪ おんっ♪ あーやっべえですわ……イクの止まらな……あんんんっ！ 小刻みにいい……びくびくイッてるうう……おおおんっ！」

リーネ「おっほつおおお!? んおおおつ！ 待って！ イッてる！ わたくしもうイッてますからああっ！」

リーネ「んんひいいつ！ 墨ちゃんに耳いじられて、また興奮しちゃってるうつ！ 待って、もう終わりですわよ!? これ以上は……おおおおんっ!?」

リーネ「んんああっ！ 無理い！ 浅イキしてたとこ、がんがん突かれたらまたイグうつ！ またイグのおっつ！」

リーネ「あー、これやばっ……マジでやばすぎ……んおおおつ！ 感じたことのないアクメ

きますわああっ！」

リーネ「わたくしお嬢様なのにいい……人間ちんぽでっ！　はしたなく全力アクメするの
おおっ！　イグッ！　あーイクイクイクイグウウ——ツ！」

リーネ「んんおおおおお——ツ！　連続精子、卵巣にいっぱいきたああああっ！」

リーネ「はあっ……んああっ……はーっ……はーっ……」

リーネ「まったく……よくも……やってくれやがりましたわね……？　わたくし、もう全然、
触手動かせなくてよ……」

リーネ「おセックスの得意な……執事に育てようとは思いましたけれど……あんんっ、こん
なに滅茶苦茶にするなんて……」

リーネ「次からは少し手加減を覚えさせませんと……」

リーネ「あらあら、今度は墨ちゃんがおセックスしたいのかしらあ」

リーネ「いいですわよお～……わたくしもう無理ですから、代わりに墨ちゃんが、その子か
ら精液しぶりとってさしあげてえ～」

リーネ「あらあら、一瞬で墨ちゃんにとらわれちゃいましたわねえ。もう見えませんわあ～」

リーネ「ていうか、わたくしの分身に、随分気に入られてますわね……わたくしもあんな風
に甘えてみようかしら？　くすくす♪」

リーネ「墨ちゃんが溶けてしまったら、次はわたくしの番ですからね……」

リーネ「せっかく手に入れた地上の人間ですからあ……ふふふ、これからもたっぷり愛して
あげないといけませんわねえ……じゅる、れろお……」

8. 【ルート分岐】質問 ~退屈なの~

リーネ「ああ～……そこそこ。そう……いいですわあ～……」

リーネ「うふふ、あなたがこのお屋敷にきて……もう数日……執事のお仕事にも慣れ始めたかしら？」

リーネ「あんっ、そうそう……♪ 特製のオイル、たっぷり触手に塗ってくださいまし……んっ、はんっ……そう、吸盤にも一つ一つ、丁寧にね……」

リーネ「やっぱりあなたを執事にしてきて正解でしたわあ。海の底のこのお屋敷、昔からの秘宝はたくさんあっても、ほかに面白いことなんにもねーんですもの」

リーネ「それとも……あなた、もしかして陸に帰りたかったりするのかしら？」

リーネ「未練がある？ ……ふうん、そうなの。わたくしにご奉仕できて、おセックスもし放題の、素晴らしい生活なのに……？」

リーネ「ここを出たら、わたくしともう二度と会えないんですよ？ 寂しくありませんの……？ わたくしは、ちょっと寂しいですわ」

リーネ「ふうん、そう……そうなんですね」

リーネ「では、こんなのはいかがかしら？」

リーネ「あなたがもし、ここにいたいと願うなら構いませんわ。存分にいてくださいまし。わたくしの退屈な生活も、あなたといれば潤いますので」

リーネ「もし帰りたいなら、手土産にこの小箱をさしあげますわ。小箱を見てわたくしのこと思い出してくだされば、それで構いませんの」

リーネ「この小箱は、わたくしの持つものの中で一番の宝物。これをわたくしだと思って、大事にしてくださいまし？」

リーネ「だけど決して中を見たり売ったりしてはいけませんわよ？ ……いいですわね？」

リーネ「さあ、どうなさるのかしら……？」

リーネ「ずうっとここで、わたくしのご機嫌をとって、一緒に生きていくのか……」

リーネ「それとも、手土産とともに、陸に帰りますの……？」

リーネ「あなたの意思を尊重しますわ……でも、帰るなら、約束は決して破らないでくださいね……」

リーネ「あなたが誠実な選択をなさることを、期待しておりますよ……？ おほほほほ……♪」

9 A. 【性奴隸ルート】産卵セックス～お嬢様の執事～

リーネ「おはようございますわあ～♪」

リーネ「今日もいい天気……と言いたいところですが、いつでもどんよりな海の底ですわねえ～。まあわたくし、日光には弱いんですけれども……」

リーネ「でもわたくしご機嫌ですわ～♪ なんでって……あなたがわたくしの性奴隸……じゃねえですか、精子袋……ではなく執事になるって断言してくれましたもの～♪」

リーネ「もう陸には戻れませんけれど……構いませんわよね？ この屋敷の中なら永久に呼吸ができますもの……」

リーネ「じゃあ早速……日課のおセックス♪ いたしましょうか♪」

リーネ「んっしょ……んっしょ……こうやってえ、あなたの後ろまで来てあげてえ……んっしょっと」

リーネ「うふふ、あなたの耳元でささやきながらあ……こうやって触手で……おちんぽしここしてあげますわあ～♪」

リーネ「後ろからささやかれながら、ちんぽいじられて……うふふっ、気持ちいいのではなくて～？」

リーネ「あはあ♪ すぐわたくし好みのカリ高ちんぽ、勃起しちゃいましたわねえ～。うふふ♪ そうでないとお♪」

リーネ「じゃあ今日はわたくしと触手セックス、いたします？」

リーネ「ほうら、わたくしの触手と、あなたのおちんぽがちゅっちゅつ、ってしてますわあ～♪ うふふ、仲良し……仲良し…♪」

リーネ「こうやって触手を巻き付けたままあ、こすってあげますわよ～。それ、いっしに、さんし、いっしに、さんし……♪」

リーネ「くすくす……せっかく触手が余っていることですし、あなたのカワイイ乳首も、こうしていじってさしあげようかしら」

リーネ「ほうら、触手の先端で……君のカワイイ乳首を……くにゅっ……くにゅっ……って、優しくいじってあげますわよ～♪」

リーネ「こういう器用な作業は得意ですもの♪ ピンク色の乳首があ、触手にいじられて嬉しい、嬉しい～♪ って固くなってきましたわね～♪」

リーネ「じゃあ、こんなこともしちゃいますわよ～」

リーネ「くすくす……は～い、今ね、触手の吸盤で、あなたの乳首を吸ってます♪」
リーネ「乳首を吸盤バキュームされる気持ちはどうかしらあ～♪ 男の子なのに、乳首ちゅうちゅう吸われて感じちゃってますの～？」
リーネ「いいですわね～♪ 乳首いじられて、ちんぽもわたくし好み、かったあいおちんぽになってますわよ～♪」

リーネ「乳首をいじりながら……おちんぽを粘液と触手で……しごいて……しごいて～……わたくしの触手が、早く精子欲しいよ～って言ってますわよ～」
リーネ「はあんっ……触手から、おちんぽのくっさい味を感じちゃいますわあ～♪」
リーネ「触手でい～っぱいしこしこしてあげますから、遠慮なく精子だしていいんですのよ～？」
リーネ「ほ～らあ、し～こっ、し～こっ♪ だ～せえっ、だ～せっ♪ 朝一番の特濃精子、わたくしの触手に下さいまし～♪」

リーネ「はあんっ、おちんぽ震えてきたあつ♪ わたくしの交接腕に、せーしっ♪ せーしつ♪ ほらあ、はやくうつ♪」
リーネ「わたくしの声にあわせてえ……ぴゅっぴゅっ♪ ぴゅっぴゅっ♪ ってしゃがれですわ～♪」

リーネ「はあんっ♪ 来ましたわああ♪ 朝一番のおちんぽ汁♪ んんっ、吸盤の一箇一個にまでびしゃびしゃかかるう～♪」
リーネ「ああんっ、苦いっ♪ 交接腕で、くさくてにっが～い精子の味感じちゃう～♪ んっ、んおっ……ごくっ……♪」
リーネ「ぷはあああ～♪ 朝はやっぱりコレですわねえ～♪ たまんねーですわっ！ うふふふふ……♪」

リーネ「ふうう……朝一のおちんぽ生しぶりもいただきましたし、今度はこっちでやりましょうかあ～」
リーネ「はあ～い、触手の付け根にあるおまんこを……くぱあ～っと♪」
リーネ「射精したばかりでもまだまだビンビンなおちんぽ、おまんこで飲み込んじゃいますわよ～♪」

リーネ「あんっ、いきなりそんなに強くう……♪ わたくしが激しい交尾大好きなの、バレちゃってるう♪」
リーネ「はあんんっ……あんっ……やんっ……おおおつ♪」

リーネ「あんうつ……はあんつ……一気に奥までえ、ずこっ♪　ずこっ♪　ってえ、くひ
いいつ！」

リーネ「はああつ、やだあつ、触手勝手に吸い付いちゃうう。執事に吸盤のキスマーカつけ
ちゃいますわあつ」

リーネ「んんつ！　あんうつ！　はあんつ！　んひいっ……ああつ……！　はあんっ♪」

リーネ「おっぽおおおおんつ！　激しいのきたあんっ♪　生殖器の奥までえ、おおっ、おち
んぽで小突かれてるううつ」

リーネ「くひいっ！　んああつ！　おうつ！　んんあんっ！　はあんっ！　んほおうつ！」

リーネ「つよつよちんぽ最っ高♪　いいですわあ、子宮ごんごん刺激されてえつ、高貴な卵、
産卵しちゃいますわあつ」

リーネ「ああつ、触手が勝手にいつ、執事のことちゅうちゅうしちゃうつ！　吸盤があ、ち
ゅっちゅつ……ちゅっちゅつ……って♪」

リーネ「わたくしもちゅうしますわあつ、ほらあ、舌をお出しになってっ！　キスしながら
腰を振るんですのよおつ！　むちゅつ、んむつ！　あんっ！　ちゅるう…！」

リーネ「んおおふう！　んんむむつ！　んむつ！　れるうつ、べろっ、ちゅる、れろれろっ
……ちゅううううう～♪」

リーネ「ふっはあつ……♪　ああん、お嬢様の吸い付きキスハメっ、んんっ！　良かったで
しょう～♪　あなたのこと、とことんまで吸い付くしてしまいますわよ♪」

リーネ「はあんっ♪　いちやいぢやキスセックスでえ、おちんぽますます硬くなりました
わあつ♪」

リーネ「ほおっ！　んおっ！　おんんつ！　はああんんっ！　いいです、いいですわよお、
その調子いつ♪」

リーネ「きますのねえ？　射精、するんでしょう？　わかりますわよお、ちんぽの先端が膨
らんでえ……あんっ、すっごいい、かたあいちんぽでごりごりされてるうつ」

リーネ「出してっ！　出して！　お嬢様を夢中にさせたあ、とびきり濃い精子いつ、はやく
出してえ！　んんんっ！　あんっ！　んああんっ！」

リーネ「ほらほら、まんこも吸い付いてあげるからあっ！　んおっ！　くるっ！　ちんぽが
びくびくしてえ……射精くるのわかるうつ！　出して！　お出しなさいっ！」

リーネ「んほおおおおおおっ♪　きたあ♪　執事ザーメンきたあっ♪」

リーネ「あっ、すごっ、やべっ♪　やべっ♪　おんっ、射精の勢いでえ、わたくしもイクッ、
イグウツ♪」

リーネ「んおおおっ射精交尾でイグッ！ イクイクッ！ んはああっイグゥウうッ！」

リーネ「おっほおおお!? イッてる！ 今イッってますわよおつ!?」

リーネ「無理無理、ダメっ、腰を止めなさいっ！ 交尾おしまいっ……くひいっ！ んおおっ！ おへえええっ……」

リーネ「んああんんっ……んんっ……」

リーネ「ああはんっ！ んなああっ！ ダメ、イグッ！ イキっぱなしいっ！ 陸上生物の底なし性欲でえっ！ またイグッ！」

リーネ「あっあっダメですわっ！ おつきいの来るっ！ すぐ来るううっ！」

リーネ「んのおおおつ!? ダメえ、イグッ！ 頭バチバチしてえっ！ 最大イキするうう！ んんんっ！ んあああっ！ おおっ！ んおおおおイグイグイグイグうう———ッ！」

リーネ「あはあああんっ……ッ！ やべーですわっ！ 精液どくどく出てるうっ！ あんっ！」

リーネ「はああっ、はあっ……んあっ……連続射精……すっご……あんっ……♪」

リーネ「はあっ……はあっ……あんっ……」

リーネ「もー、こんなに出しまくってえ……ダメですわよお……これじゃあ、受精卵たくさんできちまいますわああ……んんあっ、はあんっ」

リーネ「あっ、ダメっ……んんあっ、あんっ、んっ、おほおつ……っ」

リーネ「あっ、やんっ……んおっ、あっ、興奮してえ……んんっ、卵出る、卵出ちゃいますわあっ……んあっ……」

リーネ「んはああっ、ダメ、卵止まらないい……ドロドロの卵、たくさん出ちゃううっ、あんっ、んんっ……」

リーネ「まだお嬢様でいたいのに……お母さんになっちゃうう……あんっ……おほおつ、んんああっ♪」

リーネ「まったく……たっぷり産卵してしまいましたわ。この子たちが孵ったら……そのお世話も、執事の大手なお仕事ですからね……♪」

リーネ「もちろんわたくしのお世話も……うふふ♪」

リーネ「我が家に永久就職させてあげますので……寿命のある限り、ご奉仕してくださいませ？ ね？ うふふふふ……♪」

9 B. 【玩具ルート】慈悲無し触手で人形化～開けてはダメ～

リーネ「そう……どうしても帰ってしまうんですね……」

リーネ「では、約束通り、小箱をお持ちください。しばらくすれば、あなたはもう樹海の浜辺に戻っているはずですわ……」

リーネ「繰り返しますが、この小箱は絶対に開けてはなりませんわよ」

リーネ「仮にわたくしを想って開けたのだとしても……あなたにとって幸福なことにはなりませんから……」

リーネ「それではさようなら……どうかお元気で……」

リーネ「あら……あらまあ……うふふふふ♪」

リーネ「あなた……浜に戻ったばかりではありませんの？ あんなに開けてはならないと言ったのに……もう、すぐ約束を破るんですから……」

リーネ「もう逃げられませんわよ……？ ザーンねん♪ かわいそう♪」

リーネ「その小箱は、クラーケンの魔法の小箱……深海にいるわたくしと、つながっておりますわ」

リーネ「不用意に開けてしまったあなたは……わたくしの触手で小箱の中に掴まれて……小箱の中で、小さな人形になっていただきます」

リーネ「わたくしを捨てて陸に戻った罰ですわ♪ まあそれでも……約束を守って、小箱を開けなければ、見逃してあげましたのに……」

リーネ「もう、慈悲はありませんわあ♪ 小箱に食べられて、人形として、棚に飾ってさしあげますね♪」

リーネ「その触手はわたくしの触手と同じものですわあ。言ったでしょう？ わたくしだと思って大事にして……と」

リーネ「このまま小箱に閉じ込めるんですけども……あなたはそのままだと箱に収まらないのでえ……まずは骨を折って……小さくして差しあげますわね♪」

リーネ「うふふ、今度は手加減しませんわあ……一本一本、丁寧に折ってあげますわよお、ほおら、ぼきん……♪ ぼきん……♪」

リーネ「あらあら、痛いんですの？ かわいそう♪ 大丈夫、魔法でかわいい人形になりましたら、骨もなくなりますからね～♪」

リーネ「あら、そしたらわたくしとお揃い♪ 骨のない軟体生物ですわ～♪ おほほほ♪」

リーネ「はい、ぼき、ぼき、ぼきん♪ あらあら、もう腕も足も粉々ですわねえ♪ よ～し

よし、痛いの痛いの～とんでいけ～♪」

リーネ「人形になりましたら、痛みも感じませんから、大丈夫ですわよ～。さあ、もうご自分では歩けないでしうから……触手で引きずってあげますわあ～」

リーネ「は～い、よいしょっ、よいしょっ……このまま、小箱の中にひきずりこんであげますわよ～」

リーネ「は～い、触手で無理やり小箱の中に詰め込みますわよ～」

リーネ「あらあら……箱にひっかかって……全身の骨が碎けてますから、面白いマリオネットみたいな形になってますわねえ～♪」

リーネ「でもめんどくせーですので、このまま力技で押し込みますわよ～♪ そ～れ、えいっ、えいっ、やっ……と♪」

リーネ「はあい、これあなたはあ、骨の碎かれたぐっちゃぐっちゃの軟体生物になって、箱の中に閉じ込められちゃいましたわあ～♪」

リーネ「まあ、わたくしも骨はありませんから……これでお仲間になれましたわね♪」

リーネ「人間ならとっくに死んでますけどもお……魔法の小箱の力で、まだ意識がありますわよね～♪」

リーネ「これからあ……その小箱の中で、あなたをお人形にしちゃいますわよお……」

リーネ「うふふ、海の中に入ったみたいですわね……」

リーネ「小箱はこれから、勝手にわたくしの屋敷に戻ってきますわ……わたくしのところに帰ってくるころには……あなたはちっちゃなお人形に変わっていますの」

リーネ「わたくしとの約束を守れなかった罰として……永遠にわたくしと一緒に過ごしましょうね……」

リーネ「ご安心なさって……人形になっても意識はありますから、ずっとわたくしの声を聴いていられますわ……」

リーネ「退屈な海の底でも、聞いてくれる方がいればいいので……わたくしのおしゃべりに、永遠に付き合ってくださいましね……」

リーネ「ふふ……あはは……おほほほほ……♪」

(END)